

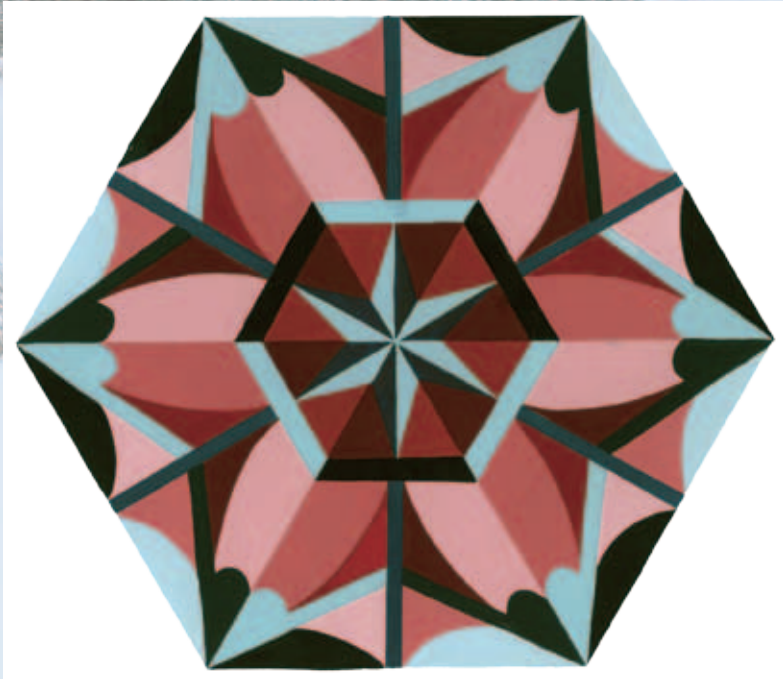
12²⁰¹⁰
December

弘前大学

学園だより

題字：遠藤正彦 学長

VOL.169



「SAKURA」制作 教育学部学生 小枝さくら

I 特集 施設紹介	2
北日本新エネルギー研究所 白神自然環境研究所	
II テネシー大学マーチン校 協定締結30周年記念によせて	8
III 第6回「言語力」大賞コンテスト	10
IV 総合文化祭報告	14
V 新任教員自己紹介	16
VI けいじぼんコーナー	16
VII 編集後記	18

特集
施設紹介



I 特集 施設紹介

北日本新エネルギー研究所

NJRISE (North Japan Research Institute for Sustainable Energy)

神本正行 (北日本新エネルギー研究所所長)

当研究所は青森キャンパスにあります。平成21年3月に設立された「北日本新エネルギー研究センター」が平成22年10月1日に「北日本新エネルギー研究所」となりました。

NJRISEの目指すもの

北日本は厳しい自然環境の中にあり、融雪や暖房の熱需要が多いという特徴があります。一方、地熱や風力等の再生可能エネルギーに恵まれています。NJRISEのリーフレットの表紙に使っている写真(写真1)は青

森の自然の厳しさ、美しさ、豊かさを表現したものです。寒冷地と地域特有の環境の中で、豊富な再生可能エネルギーを賢く利用することにより、自然と共生する豊かな社会を構築することが求められています。私たちはNJRISEのミッションを「寒冷地や地域特有のエネルギーシステムに関する研究・教育・実践」と決めました。

ミッション実現のために以下の3つの目標を立てています。

(1) 革新技術を創り、地域産業育成に貢献し、技術を世界に発信します。

(2) 新エネルギーの効果的な利用法を提案します。

(3) 新エネルギー産業人材の育成と技術の実践を目指します。

平成22年10月1日現在、専任教授4名、専任准教授3名、兼任教員・特任教員9名、事務職員2名、非常勤スタッフ3名という陣容です。2名の大学院生もNJRISEで研究を行っています(写真2)。わが国の国立大学の中では新エネルギーを目的とした最大規模の研究所ですが、それでも多岐にわたるエネルギーの研究をすべて行うことはできません。研究課題を重点化し、学内外との連携を深めることが重要です。東大、北大、東北大学、大連理工大、産総研、青森県産業技術センター、青森県等との交流を進めているところです。

当面の重点課題

(1) 環境エネルギーシステム：寒冷地用EV、燃料電池等のシステム技術とシステム評価

寒冷地では冬場の暖房需要が極めて大きく、普及拡大の期待される電気自動車を利用する際



写真1 青森の自然

にも、航続距離を落とさずに暖房のためのエネルギーをどのように賄うかが大きな課題です。四輪駆動車を安全で効率よく走行させることも必要です。燃料電池は電気だけでなく同時に熱が発生するため寒冷地に向けたエネルギー供給システムです(図1)。バイオマスから得られる燃料を使うこともできます。しかし経済性、寿命等に課題が残されています。低炭素社会を目指したこれらのシステムの早期実現のため、研究開発を進めています。

(2) 新エネルギー利用技術：地熱等の熱利用、バイオマス総合利用、貯蔵等

暖房需要とともに重要な寒冷地の課題に融雪があります。夏も冬もほぼ一定の温度の地中熱を、冷暖房に利用するだけでなく融雪にも利用することができます。問題は経済性です。安価なシステム開発が求められています。青森県は中低温の地熱の豊富な地域でもあり(図2)、中温域の温泉熱は発電にも利用可能です。現在、地中熱や地熱がどの地域でどの程度利用可能かを調査しながらデータベースを構築しつつあります。これらを基に地中熱利用や地熱発電・温泉熱発電の実現を目指しています。

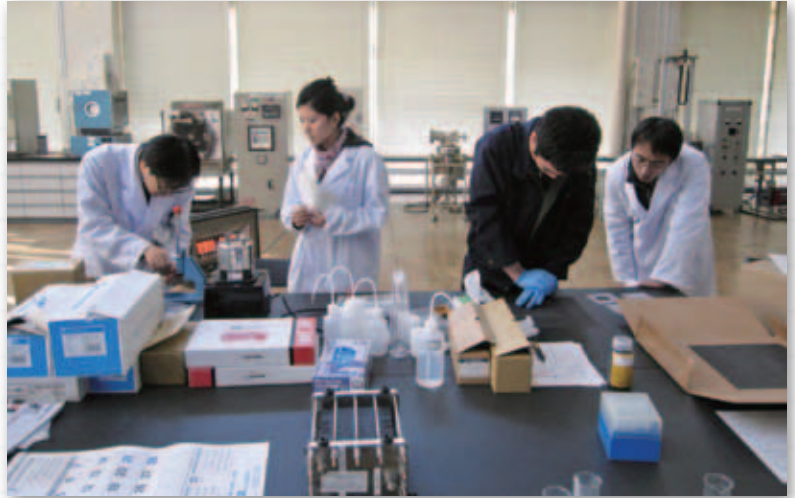


写真2 実験中の大学院生

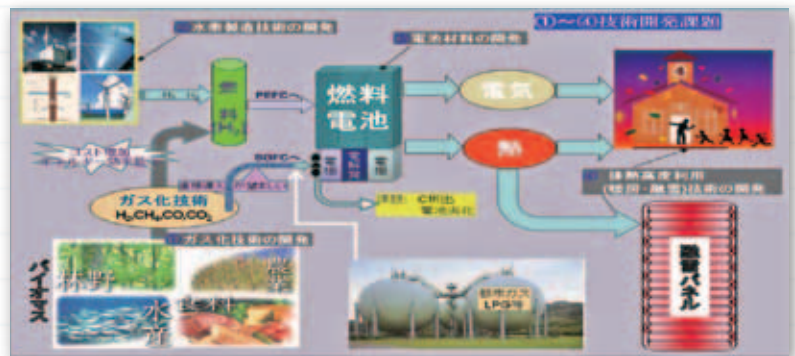


図1 寒冷地向けの燃料電池システム

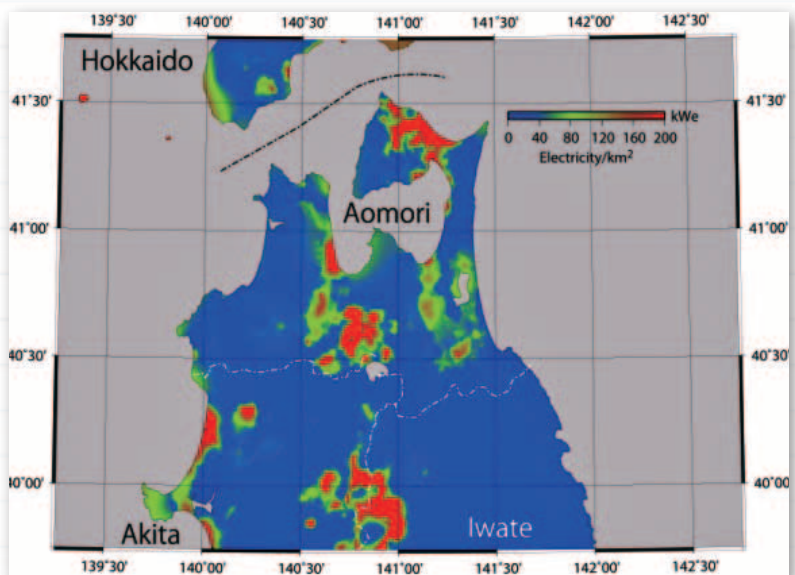


図2 青森県に豊富に存在する中低温熱水資源

(3) エネルギー変換技術：シリカ還元、バイオマス変換、燃料電池材料等

太陽電池材料の研究にも取り組んでいます。現在主流のシリコン太陽電池には超高純度の半導体級シリコンが使われていますが、製造に多くのエネルギーを要しています。太陽電池で必要とされる程度の純度の太陽電池級シリコンを、地球上に豊富に存在する珪砂（シリカの砂）から直接還元プロセスにより安価に製造できれば（図3）、資源問

題もなくなり、太陽電池製造時の省エネ化にもつながります。シリカの還元やバイオマス変換については、理工学研究科、農学生命科学研究科との連携の下に研究を進めています。

製品化・ベンチャー設立と実証研究

技術の製品化、ベンチャー設立等にも取り組んでいます。弘前大学認定ベンチャー第1号の弘星テクノ株式会社ではヒートポンプを用いない安価な融雪シ

ステム（写真3）の普及を目指しています。また、日本パーツセンター社等との共同開発によりローテーションフロー型風車発電を用いた標識灯電源システム（写真4）を商品化しました。

社会と密着した実証研究も行っています。消費電力の見える化や需要予測シミュレーション等の情報通信技術に関する実証実験を、六ヶ所村で開始しました。これらの技術がどの程度環境負荷を低減できるかを評価し見える化する予定です。

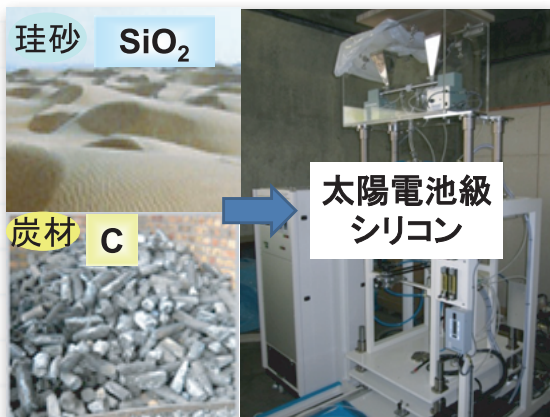


図3 珪砂の直接還元による太陽電池級シリコンの製造

当研究所は青森県の誇る棟方志功記念館の隣に位置しています。エネルギーを専門とする多数の教員が集まりましたが、研究所としてはまだまだこれからです。『わだばゴッホになる』と言っていた棟方志功が世界の棟方になったように、「北日本新エネルギー研究所」が新エネルギーの世界的拠点となるよう、教職員一同頑張っています。



写真3 弘前大学構内に設置したヒートポンプレス地熱温度差融雪システム



写真4 地吹雪除けの防雪柵に取り付けたローテーション型風車

白神自然環境研究所

佐々木 長 市 (白神自然環境研究所所長)

1. はじめに

白神自然観察園は平成21年4月に発足し、同11月には開園式が盛大に西目屋村の中央公民館で行なわれました。弘前大学の独法化後の生き残りをかけた個性化の一つとして、遠藤学長の強いリーダーシップのもと開園がなされ、各学部から教員の協力で運営委員会を組織して本年9月まで経緯しておりました。遠藤学長の発案により、予算申請の位置づけ等の戦略及び対外的な大学のミッションの明確化をはかるため学内施設から、大学の附置研究所に位置づけを変更しております。

2. 施設等の概要

白神自然環境研究所は、西目屋村川原平に約18haの里山を有し、ここに研究所の施設が完成し、12月2日に落成式を行いました。この周辺が、研究所附属の白神自然観察園となります。春のイワウチワの見事さは、ガイド関係者にも知られていません。春の妖精といわれる草花がブナの萌葱色の頃には観察され



白神自然環境研究所落成式の様子

ます。この他、サンショウウオやニホンザルなどもいて里山の自然観察には最適な場所です。世界遺産の核心地から3kmと近いため、熊やニホンカモシカなども生息しています。研究所は、カラマツの木を残し、この間を縫うようにして8m×23.5mの敷地面(188㎡)を持つ2階建ての建物として建設されています。入り口には、駐車場(約10台)と遊歩道に通じる木質系舗装(幅1.5m)も完備しています。研究所には、小中学生の環境教育や理科教育、講義、市民向け講演などのための研修室(9×6.3m=57㎡)、全学

的な要望でできた共同実験室(3.6m×6.3m=22.7㎡)、専任教員の研究室及び実験室が4部屋、この他に調査研究時に利用する男女更衣室兼簡易な宿泊施設(2部屋、4畳半)とシャワー室、施設の維持管理を担当する事務職員室(2階、3.6×9m=32.4㎡)が設けられています。この建物の入り口付近に、理工学部の寒地気象実験室を岩木山から移転し、継続的な気象観測を実施する予定です。将来的には、全国共同利用施設化を目指し、共同研究などの来訪者にむけた宿泊施設も必要と考え施設設計しました。現在、園内には



遊歩道入り口



遊歩道途中の橋



園内でのニホンザル様子

遊歩道と東屋3塔が完成し、自由に観察ができる状態になっています。東屋は、人間ばかりでなく、猿や他の動物も利用が確認されています。トイレは、観察園が市民にも利用される施設となることを考え、外から利用できる2カ所と内部からの利用の3カ所に分けて設置しました。この他に、地下水を汲み上げるポンプ室兼電気室、浄化槽や貯水槽が設置されます。

毎年11月下旬～翌年4月末までは、暗門の滝まで至る白神ラインが雪のため通行止めになるので研究所の活動も大学のコラボ弘大5Fの分室に移動します。冬期は、この研究所分室で活動することになります。冬期はこちらに相談等をお願いします。

3. 研究教育体制

専任教員は、教授が未だ決まっておりませんが、教員3名が配置されます。植物分野の教授及び助教、動物分野の准教授が中心メンバーとなります。この他に施設の管理などのための事務職員が若干名勤務することになります。また、10月以降は、各学部からお願いした兼任教員とともに教授会を設置し、研究所の活動内容などについて検討を行っております。

現在、研究は4部門で進めることを計画しています。

第一は、白神山地の貴重な植物の研究を進める部門です。木本と草本に造詣の深い専任教員を配置し、本園の特徴であるイワウチワなどの草本からブナやミズナラなどの木本までの植物の研究を中心に考えています。第二は、昆虫から熊まで、多様な分類群を研究対象とする動物部門です。第三は、地球温暖化の懸念に対応した気象分野と地滑りなどの地象を中心とした、動植物の環境を網羅的にカバーする気象地象部門です。第四は、環境教育、またぎなどの培ってきた伝統文化、施設の周囲には発掘される縄文の遺跡まで等をカバーする教育文化部門です。この4部門で総合的に研究を推し進める計画です。また夜間の動植物の観察会なども計画しております。現在は、弘前大学で概算申請した予算に基づいて、事業が進められ、動植物関係の書籍などを出版しています。研究所の役割は、弘前大学の研究者により得られた貴重な研究成果を中心とした情報の蓄積と発信と認識しております。観察園の利用に対しては、毎年2月末には、教員全員へ案内をお送りすることになっております。

研究所の運営は、学内で既に白神山地の研究を進められておられる教員及び学外の施設や研究者とも連携し、地域貢献にも配慮しつつ進める予定です。皆さんの協力を切にお願いします。



イワウチワ



熊の爪痕



不識の塔から園内の遠景



テネシー大学マーチン校協定締結

国際交流センター長 倉又秀一(理工学研究科)

1975年秋、教育学部の花田教授がテネシー大学マーチン校(UTM)を訪問して、留学の奨学金を得た2名の学生が、UTMの近くにあるジャクソン市ユニオン大学で勉学を始める前の集中英語クラスをUTMで受けられるかどうかを尋ねた。すべてはここから始まり、弘前大学の最初の姉妹校協定を、UTMと結んだ。これが、1980年である。以来、学生、教員、職員の交流も始まり、UTMは弘前大学の国際交流を語るには欠くことのできない協定校で、今年協定締結30周年を迎えた。(協定いたる経緯とその後の交流については弘前大学50年史の西村清巳先生の記事を参照。)

この30年の間、33名のUTM

からの学生の受入れ、86名の学生の派遣、教員の交流は派遣26名、受入れ24名にのぼっており、対等な形での教員・学生の両方の交流が行われている唯一の協定校である。さらに最近では、職員の語学研修のためのUTMへの派遣、UTMからの1週間程度のトラベルスタディなどが行われ、交流がさらに活発になっている。そこで、30周年を記念して、両方の大学でいくつかの記念事業が開催された。その模様を報告する。

8月にUTM学長のトーマス・レークス博士らが来訪され、弘前大学において、名誉博士号の授与、記念シンポジウムが執り行われ、UTM一行はネプタの運行にも参加された。記念シンポジウム

においては、UTM前国際交流部長のサンドラ・ベーカーさんが基調講演を行い、交流の歴史を振り返り、弘前大学との協定校提携は、他の協定校関係の手本となるものであり、今後のさらなる発展が期待されると総括された。このシンポジウムには、UTMに研修に行った職員、UTMからのトラベルスタディの学生をホームステイさせていただいたホストファミリーの方も参加し、弘大UTMの交流について活発な議論がなされた。

10月弘前大学の遠藤学長一行がUTMを訪問した。ホームカミングデイ(卒業生が大学に集まる日)が行われる時期に招待していただき、特別な行事に参加する機会を得た。30周年に関連したも

レークス学長のねぶた参加



30周年記念によせて

のとして、国際教育センター主催の歓迎昼食会や、顕著な活躍をした卒業生と大学の関係者との夕食会 (Alumni Awards Banquet) があり、そこで遠藤学長は UTM メダル (Chancellor's Medallion) が贈られた。さらに、マーチン市主催の、弘前市との交流に参加した人や交換教授で弘前大学に来られた UTM 教員が参加した夕食会 (ここで遠藤学長はマーチン市の鍵を贈られた)、桜の記念植樹などが行われた。さらに、ホームカミングデイの呼び物、アメリカンフットボールの試合のハーフタイムにグラウンド上で弘前大学からの一行が紹介され、大きな歓迎を受けた。我々の応援が功を奏したのか、20試合連続で負けていたチームに対し初勝利を収め、ホームカミングデイに花を添えた。

ホームカミングデイでは、弘前へのトラベルスタディを実施しているキョウコ・ハモンド先生の日本語クラブがテントの出店を持ち、小型のねぶたも作成され、そこで多くの弘前大学留学経験者との再会を果たすことができた。トラベルスタディで来た学生が1年の短期留学に参加し、さらに大学院生として弘前大学に戻って来てもらいたいものである。日本語クラブのテントでは、弘前留学経験者の御両親を中心にして、バーベキューが用意され、我々にもふるまわれた。

年次ごとの同窓会も同時に開かれているようで、学内に何年のクラスはどこどこに集合などの案内が掲示されていた。そしていろいろな学生のクラブや学生連盟が卒業生に活動を示すテントが張られ

ていた。日本流風に説明すれば、学園祭に合わせて卒業生を招待しているような感じであった。音楽サークルの演奏も行われ、ハモンド先生が招待した津軽三味線の演奏もあり、多くの人を集めていた。かなりモダンな感じの津軽三味線で、スティールパンとのセッションも行われていた。

たまたま30周年の年に国際交流に関わっていたので、このような行事に参加することができたが、これらを紹介することを、学生、教職員がUTMに関心を持ち、いろいろな形でUTMとの交流に参加するよすがとしたい。そのような参加を得て、UTMの交流の次のステップへ発展して欲しい。



Ⅲ 第6回「言語力」大賞コンテスト

「言語力」とは、読む力・書く力・調べる力・伝える力を含めています。
弘前大学附属図書館は、学生の皆さんに『言語力』を養ってもらおうと、平成17年度より「言語力」大賞コンテストを実施しています。第6回コンテストの受賞作品から部門Ⅰ「文学作品部門」の大賞を掲載します。

光の汀 みぎわ

大賞 人文学部2年 山内 梢

朝、目が覚めると、蝶の翅音^{はとおと}が聞こえました。

鱗粉を落とすことさえ憚るような、そのしとやかな音は、しばらく私の周りを漂っていましたが、やがて、戸の方へと遠ざかっていきました。

春の光の匂いがしました。朝のお務めを終え、私は門を出て湖へと向かいました。砂利を踏む音が、次第に砂を踏むさくさくとした音に変わります。空気を嗅ぐと、鼻にこもるような硫黄の匂いがしました。今日は一段と、臭気が強いようです。湖に流れ込む硫黄の川も、今日はたくさん湯気を上げ、黄色い流れを作っていることでしょう。

湖の岸边は、いつもと変わらず、静かで寂しい場所でした。風の音と、風に揺れる草葉や木々の枝の音以外、まるで気配がありません。時折、魚が跳ねる音や、鳥が鳴く声が聞こえましたが、どれも水や山に吸い込まれるように消えていきました。皆、この静寂に遠慮したのかもしれません

ん。私は目を閉じ、静謐な空気を味わいました。

「——すみません」

ふと、近くで声がしました。いつの間にかいたのか、若い男の人が私の後ろに立っていました。私は振り向き、訊きます。

「はい。なんでしょうか」

「お寺はこの先ですか」

どうやらその人は、お寺を訪ねにこの御山^{みやま}にいらしたようでした。私は「はい」と頷きます。

「そうですか。ありがとうございます。」

実は、妻に会いにきました」

彼が微笑むと、空気が柔らかく変わりました。私も「そうですか」と頷き、頬笑みを返しました。

「会えるといいですね」

「はい」

彼は嬉しそうに頷くと、私に会釈をして去っていきました。

すぐに岸边は、静かな音だけが満ちる場所へと還りました。私はいつものように、白い光を探して、湖面

を見つめ続けました。

からから、からからと、遠くで風車が回っていました。

夏が近づくと、御山にはわかに騒がしくなります。鳥も、虫も、草も、木も、御山に吹く強い風に乗って、楽しげに遊び回るので。人の気配も増え、お寺は賑やかになります。私もお務めで忙しくなりますから、春のように日がな一日、岸边を散策するということもできません。それが少し寂しくもあります。

あの人に再び会ったのは、ようやくその日のお務めを終え、久々に湖へと足を伸ばした時のことでした。

辺りには相変わらず硫黄の匂いが漂っていましたが、昼間に元気を蓄えた青草と土の匂いの方が強く、私は胸いっぱい空気を吸い込みました。そして、慎重に砂浜へと降り、二、三步あるいたところで、彼がいることに気がついたのです。

彼は湖を見つめ、静かに佇んでい

るようでした。

「——おや、あのときの」

私に気付いた彼が、振り向きました。薄明の中、私に微笑みかけてくれたに違いありません。やはり、彼が微笑むと、空気が柔らかく変わるのでした。

「こんにちは。また、お一人ですか」

「はい」

私は頷きます。彼が「そうですか」と頷き返しました。

彼の隣に並んで立ち、私は訊きました。

「奥様には、会えましたか」

すると、彼は寂しげな様子に変わり、小さく首を振ったのでした。

「いえ。残念ながら」

そうですか、と私は目を伏せました。彼も黙り込み、遠くに目を馳せたようでした。

「——あ」

唐突に、彼が小さく声を漏らしました。続けて、砂を踏み、どこかへ向かいます。私は首を傾げ、彼の方を見つめました。

「ほら」

六歩ほど離れたところで立ち止まり、何かを指しているようでした。私は「なんですか」と訊きます。

「ほら、この草が固まって生えているところに、糸蜻蛉がたくさん集まっ

ています。茎にヤゴの抜け殻がついていますね。ここが、彼らの出立の場所なんでしょうか」

確かに、今まで気付きませんでした。湖の岸边にはたくさんの糸蜻蛉が飛んでいるのでした。ふわり、ふわりと飛ぶ様子は、まるで蒲公英の綿毛のようだと彼は言いました。

「青に、緑に、水色……きれいですね」

「きれいでしょね」

点在する草の島のあちこちで、蜻蛉たちは羽化しているようでした。風が吹き、草が揺れると、茎に掴まっていた彼らが一斉に飛び立ちます。無数の聞こえない翅音が集まって、ほんの一瞬、風のささやきのような音が聞こえました。

「糸蜻蛉の群舞ですね」

彼の言葉に、私はそっと目を閉じました。

沈みゆく日の光の中で、風にあおられるように、舞を見せる蜻蛉たち。その翅や体は、残光を反射する湖面のように、白く輝いているに違いありませんでした。

火山湖を囲む山の木々が、葉を赤く燃え上がらせる頃、私は風車を片手にお寺の広大な敷地を歩いていました。ごつごつとした岩場が続くそこは、まるで地獄のような景色だと、

人々は言います。白の強い灰色の岩は、打ち捨てられた人の骸や獄卒の鬼に見え、その岩と岩の隙間から上がる湯気は、人を煮る大釜のそれか、亡者を焼く煙のように見えるのだそうです。

私は狭く歩みにくい道を、慎重に、慎重に進みました。何度か転びそうになりましたが、そのたびに岩に手をつき、体を支えます。手には、ざりざりとした砂がつかまりました。

からから、からからと、この死した園に、いくつもの風車が回る音が響きます。硫黄の匂いが風に流され、私の横を過ぎていきました。やがて足場は岩から砂利、砂へと変わり、私は湖の岸边へと辿り着きました。ちょうど、私がいとも足を伸ばす岸辺の対岸にあたる場所です。打ち寄せる水音に向かって歩くと、波がつま先を濡らしました。私はそこで立ち止まりました。しゃがみ込み、持っていた風車を砂に刺しました。

「——何をしているんですか」

隣に、あの人が立っていました。私は「また会いましたね」と挨拶します。

「供養をしているのです」

「どなたの」

「さあ、誰でしょう」

私はあいまいに微笑みました。彼が私と同じようにしゃがみ込みます。

私たちは風車が回る音にじっと耳を傾けました。

「この浜は、極楽浄土の浜辺のようですね」

しばらくして、彼が言いました。

「白い砂がどこまでも続いていて、湖は青のような緑のような美しい色合いだ。この世のものとは思えません」

私は「そうなのでしょうね」と頷きました。

「日が暮れる、その一瞬が一番美しいのだそうです。波に光がきらめいて、空は赤や紫に染まる……白い砂浜がことのほか映えて、まさに極楽のような景色になるそうですよ」

「それは見てみたいですね」

彼が頷き、微笑みました。柔らかく変わった空気は、どこか甘く感じました。からからからからと、風車は回ります。波は静かに、静かに、繰り返して打ち寄せていました。

やがて――

「――どうやら、極楽の景色を見られそうですね」

彼が言いました。もう、日が沈む刻限になっていたのです。私は薄く目を開け、湖を見つめました。

「ああ、きた」

彼が感嘆の息を漏らしました。何

が見えますか、と私は訊きました。

「おっしゃる通りの、極楽の景色です。こんなに美しい風景が、この世にあったなんて……まるで夢か幻を見ているかのよう」

からから、からから。風車が嬉しそうに笑いました。

「では」

私は訊きます。

――湖に、白い光は見えますか。

「見えます」

彼が頷きました。

「水面がきらきらと輝いて、光を放っています。真っ白に」

私は「そうですか」と頷き、目を閉じました。瞼の裏いっぱい、白い光が満ちました。からから、からから。

足元の風車はしばらく回った後、ぱたりと倒れて、波にさらわれていきました。繰り返し打つ波にたゆたって、いつか彼岸へと流れ着くのもかもしれません。

板の間に座っていると、雪降りの音が聞こえました。

空気は冷たく、吐く息の方が温かく感じます。どうやらこの御山にも冬が来たようでした。

人の途絶えたお寺は、しんと静まりかえっています。わずかに残った

人の声が、大きく聞こえるほどです。私は立ち上がり、縁側の戸を開けました。

「――降ってきましたね」

あの人がそこにいました。私は「はい」と頷きます。

「じき、積もります。御山が閉じる前に、私はここを出て行かなくてはなりません」

「山を降りるということですか」

「はい」

私が頷くと、彼は微笑んだようでした。しかし、その笑みがどこか寂しげであることに私は気付きました。

「行かなくてはなりませんか」

「ええ。長い冬が終わり、御山が開くそのときまでは」

そうですか、と彼は呟きました。悲しそうな声でした。

私は足袋のまま、縁側から石畳の上に降り立ちました。彼の方へ向かって歩き、手を差し出します。彼の冷たい手が、そっと私の手を引き寄せました。

私は微笑み、告げます。

「春になったら、帰ってきます」

彼の指は氷のように冷えきり、私の弱い熱ではちっとも温かみが伝わらないようでした。むしろ、その微弱な体温さえ奪われ、私の指先も



次第に凍えていきました。

それでも彼は、嬉しそうに「あた
たかい」と呟いてくれたのでした。

「あなたが、山を降りるなら」

彼が言いました。

「私もそろそろ、行くことにしましよ
う。道が、雪で閉ざされてしまう前に」

さようなら、と彼の声がありました。

私は、最後に訊きました。

「白い光は見えますか」

空気が、柔らかく、甘く、そして、
あたたかなものになりました。

彼は「はい」と囁きました。

「空から光が降ってきます。夜の闇
にぼくと浮かぶ、真っ白な光が」

「……そうですか。それはきれいで
すね」

私は顔を閉じ、そう告げたのでした。

やがて、彼の手の感触がなくなり

ました。

すうと雪が溶けて、消えていくように。

凍える空の下で、私は一人、立っ
ていました。

ある日の朝。私は、雪が消える音
を聞きました。そして、土の匂いとと
もに、白い光を見たのでした。

了

「言語力」大賞コンテスト実行委員会 委員講評

奥深い山のなかの湖が舞台だ。その岸边で、まるで、彼の世と此の世とがクロスしているような光景が展開していく。したがって読み手は異界に迷い込んだような、ふしぎな世界に誘われることになる。静謐きわまりない湖に舞う蜻蛉、可憐に咲く花、湖面の白い光と漂うような音を、移ろいゆく季節のなかで、ストイックな文体で描出する、その筆力には、驚きを禁じ得なかった。作品の構造がしっかりしているゆえ、四季折々の自然描写が、いっそう輝きを放っているようだ。

第6回弘前大学学生「言語力」大賞コンテスト 受賞者一覧

1. 部門・テーマⅠ

Ⅰ：文学作品部門(ジャンルは自由)

大賞	人文学部2年	山内梢	「光の汀」
優秀賞	医学部3年 人文学部1年	梅田大峰 石川穂穂	「エモーショナル・エモーション」 「John Smith & Company!!」
佳作	人文学部3年 人文学部1年	柳谷智美 葛西鈴香	「伝言板ネットワーク」 「悪夢の果てに」

2. 部門・テーマⅡ

Ⅱ：評論部門(「21世紀における地域の発展に向けて」)

佳作	教育学部3年	佐藤雄哉	「ケータイと生きる」
----	--------	------	------------



IV 総合文化祭報告

第 61 回

弘 大 祭

を 終 えて

弘前大学学祭本部実行委員会
委員長 大谷弘恵

10月22日から24日の日程で行われた第10回弘前大学総合文化祭並びに第61回弘大祭は無事にその幕を下ろしました。3日間の来場者数は7200人以上という、過去最大の人数を記録しました。多くの来場者で賑わう文京キャンパスは、まさに今年のテーマ「彩」に込めた“華やかな盛り上がりを見せて欲しい”という想いが実現された様子でした。

さて、今年の総合文化祭は10回目

という節目の年でした。過去の実行委員長や遠藤学長、吉田前学長を交えた座談会も企画され、過去を顧みる良い機会に恵まれました。弘大祭運営の危機から10年、このような盛り上がりを見せるまでとなったのも、先輩方や大学側のご協力のお陰です。しかし、来場者のアンケートには「学生の積極的に取り組む姿勢が感じられない」等の厳しい意見をいただいています。大学側と学生が協力する総合文化祭が定

着し、多数の方に来場していただけるようになった今こそ、総合文化祭のあり方というものを再認識する必要があると思います。

本学の総合文化祭は、学生が日頃の成果を発揮する場、そして、地域と大学の結びつきを強める場だと思います。学生は、ステージや屋内で演奏や発表を行い、各学部や研究室では研究成果の発表や展示等を行っています。弘大生が日々の講義・研究、部活動・



Opening Festival での葛西弘前市長とたか丸くんの2ショット



てがた DE アート 小さな子供達も参加



つがる市のマスコットキャラクター「つがるちゃん」



総合文化祭10周年記念 てがた DE アート作品

サークル活動等を積極的に行っているということが表れています。また、地域の方々も、模擬店やイベント等で学生と直接交流し、各学部での出展や学術文化祭では大学での研究を知ることができます。来場者数が年々増加傾向であるということは、本学への関心や期待も大きくなっていることだと思います。

それでは、なぜ未だにアンケートでの厳しい意見が絶えないのか。私は、来場者ひとりひとりの満足度が低いからだと思います。来場者は人それぞれによって、総合文化祭を訪れる目的が違います。学生によるイベントや模擬店を楽しみに来る方や、

アカデミックな内容を期待する方等、様々な目的で来場します。

満足度を上げるためには、出店(展)や発表等をする学生・教員が、“来場者が何を目的に、何を期待して訪れるか”を意識して企画・運営する必要があります。また、学生・教員の更なる積極的な参加が求められます。さらに、我々学祭本部をはじめとする運営する側が、広報の際に、来場者数を伸ばすことだけでなく、総合文化祭の内容・良さを伝えるための工夫をするべきです。

総合文化祭は、本学と地域の距離を近づける絶好の機会です。それと同時に本学の評価を下げても可

能性も大きいです。そのためにも、内容を濃いものとし、満足度を上げることが重要ではないでしょうか。

課題が多いということは、総合文化祭はまだ発展の見込みがあるということです。私が総合文化祭を運営した目的は、来場者や弘大生の笑顔を見るためです。今後、来場者の満足度が上がり、その笑顔が輝きを増すことを望んでいます。

最後になりましたが、総合文化祭に携わってくださった本学教職員の皆様や弘大生に厚く御礼申し上げます。そして、本学の発展に総合文化祭が寄与することを願っています。



大道芸サークルのパフォーマンス LIVE



総合文化祭10周年記念 模擬店みしえらんで優勝し喜ぶ模擬店代表者



学長主役イベントで商品を受け取る学生



大抽選会の様子



V 新任教員自己紹介

理工学研究科



理工学部研究科
数理科学科
教授
津田谷 公利

長年住んだ札幌を離れ、9月1日付けで理工学研究科に着任しました津田谷公利です。

専門分野は偏微分方程式論で、非線型波動の漸近解析を研究しています。

先日念願が叶って弘前公園を訪れることができました。真っ赤に染

まった紅葉が実にきれいでした。桜の季節では違った光景が見られそう楽しみです。歴史あるこの地域に溶けこみながら、研究、教育、社会活動に貢献できるよう職務に励む所存です。

どうぞ宜しくお願い致します。

VI けいじばんコーナー

第61回東北地区大学総合体育大会開催

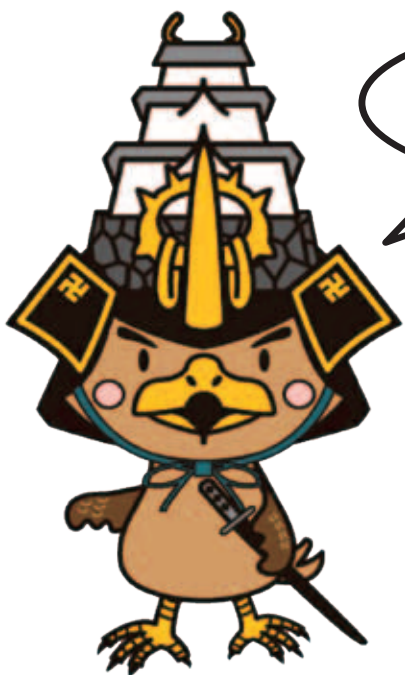
第61回東北地区大学総合体育大会は、東北地区大学体育連盟加盟の48大学が参加して、6月8日(火)～10月31日(日)の日程で開催されました。

弘前大学では、剣道(9月26日)が青森県武道館で22大学242名が参加して開催されました。



弘前大学総合文化祭10周年記念事業

**君が弘前大学の
マスコットキャラクターを作ろう!!**



**みんなの応募を
待ってるぜ!!**

賞金はなんと

優秀賞3万円!!

準優秀賞2万円、佳作1万円

たか丸くん
弘前城築城400年祭
マスコットキャラクター

弘前大学のマスコットとして学内・学外の行事や様々な広報活動に活躍するキャラクターを募集します

- 応募方法**
- ・白紙 A4 版用紙に彩色したもの。画像データの場合も必ずプリントアウトしたものを提出してください。
 - ・何点でも応募できますが、用紙一枚にデザインは一点とします。
 - ・応募者本人が創作したもので未発表のものに限ります。
 - ・提出にあたり、裏面に以下を必ず明記してください。
 - ①作品名称 ②応募者氏名(ふりがな) ③所属(学生は学年も)
 - ④住所 ⑤電話番号
 - ・応募作品は返却いたしません。

募集期間 平成22年10月25日~23年1月31日

応募資格 弘前大学に在学中の学生、附属学校・園の生徒等、弘前大学の教職員
*個人、団体は問いません。

発表 平成23年3月1日予定(本人へ通知するとともに大学HPで公表)



2010.10.掲示

【問い合わせ先】 弘前大学学務部学生課 電話：0172-39-3112 Email：jm3112@cc.hirosaki-u.ac.jp

「学生学習支援室」とは

数学、物理や英語が苦手な学生で、大学の講義だけではまだよく分からないという学生に対して相談員が学習指導や助言等を行うための部屋です。

相談には、皆さんの先輩である**大学院生**や**学部学生（3・4年生）**が対応します。相談を受けるにあたり、事前登録や予約などは必要ありませんので、是非「学生学習支援室」を訪ねてください。

また、自由に自習できる自習スペースも設けていますので、気軽に利用してください。たくさんの学生の利用をお待ちしています！

記

指導教科：**21世紀教育科目**

「英語コミュニケーション実習」

「数学の基礎」

「物理学の基礎」の3科目です。

相談員：**大学院学生及び学部学生**

実施期間：**平成22年11月1日から**

平成23年2月8日までの授業がある日

相談

受付時間：**12：00～15：00**

(※自習スペースは17：00まで開放します。)

場所：**総合教育棟1階**

言語コミュニケーション実習研究開発室



Ⅶ 編集後記

12月4日、東北新幹線が全線開業しました。年が明けると、前号(168号)で特集した弘前城築城400年祭が本格的にスタートします。大きな節目になる行事が続いていきます。

さて、『学園だより』169号をお届けします。本号は、2つの新施設の紹介、テネシー大学マーチン校との協定締結

30周年記念行事の紹介、第6回「言語力」大賞コンテスト大賞作品の掲載、そして弘前大学総合文化祭の報告と、バラエティーに富んだ内容になっています。研究・教育を充実させるための取り組み、そして学生の頑張りが垣間見ることができます。原稿や情報をお寄せいただいた皆さんに、改めて御礼申

上げます。

編集委員になって半年ほどですが、意外と学内のことを知らないことに気づかされました。情報発信あるいは情報共有の場として、この『学園だより』がもっと活用できるのではないのでしょうか(編集委員の仕事が増えるのは困りますが…)。(KH)

2010年 弘大生の病気・事故等 による給付補償金は **2145万円** でした。

2010年は356名の弘前大学生が病気や事故、盗難などのアクシデントに見舞われ、加入している共済あるいは保険から補償されています。

その内容を、大学生協の学生総合共済(以下生協共済)と学生教育研究災害傷害保険(以下学研災)の給付実績をもとにまとめました。*学研災は生協が大学より業務委託を受けて事務を代行しています

【2009年12月～2010年11月の給付件数と給付金額】

項目	生協共済		学研災		合計	
	給付件数	給付金額	給付件数	給付金額	給付件数	給付金額
病気入院・手術	87人	854万円	0人	0	87人	854万円
事故入院・手術	49人	252万円	1人	5万円	50人	257万円
事故通院・固定具	177人	437万円	0人	0	177人	437万円
本人死亡	2人	200万円	0人	0	2人	200万円
盗難・借家人等賠償	20人	196万円	0人	0	20人	196万円
扶養者死亡・見舞金	20人	200万円	0人	0	20人	200万円
合計	355人	2140万円	1人	5万円	356人	2145万円

特徴①

日常生活では、自転車運転中の事故が多くなっています。

通学中の車との接触事故が多く報告されています。通いなれている道でも、あらゆる状況を想定し、注意して走行することが大切です。

特徴②

病気では消化器系、呼吸器系の給付が多くなっています。

季節の変わり目、試験期間など生活の変化が大きいときに給付が多くなる傾向があります。普段からの体調管理に気を配りましょう。

特徴③

水道管凍結破裂による水漏れ事故が報告されています。

100万を超える被害もありました。長期休暇など家を長くあける時は必ず「水抜き」をしましょう。ちょっとした注意で被害が防げます。

Q 入院費用はどのくらいかかる？

たとえば大学生が病気で入院したら、どのくらいの入院費用が必要になると思いますか？

- 平均入院日数 17.5日
- 治療費用の平均 143,874円
- 雑費(交通費等) 32,072円

2008年の大学生協共済事業報告では、上記のようになっています。治療にかかった費用と雑費の費用合計を、入院日数で割ると1日あたりの入院費用は約1万円となっています。生協共済は、2009年に保障制度が改善され、入院1日あたりの保障日額が1万円と、大学生の実態により合った保障内容となりました。

●給付の申請手続きは生協店舗で簡単にできます。

(文京地区) SHAREA たび SHOP tel.0172-37-6480
(本町地区) 生協医学店 Ferrio tel.0172-35-3275
お気軽にお申し出、お問い合わせ下さい。

- 食堂入口に設置されている給付ボードで、毎月の特徴的な病気・事故や給付内容を掲示し、予防の呼びかけもしています。





記念会館



教育学部校舎



弘高生青春の像

弘前大学 学園だより Vol.169

2010年12月発行

学園だよりに関するご意見がございましたら、
下記のアドレスまでお寄せ願います。
e-mail: jm3113@cc.hirosaki-u.ac.jp
弘前大学学務部学生課



国立大学法人 弘前大学 「学園だより」編集委員会

委員長

一戸とも子（教育・学生委員会）

委員

平野 潔（人文学部）
佐藤光輝（教育学部）
松谷秀哉（医学研究科）
中野 学（保健学研究科）
任 皓駿（理工学研究科）
藤田 隆（農学生命科学部）
佐々木宣子（学生課）
佐々木忠（学生課）

印刷：ワタナベサービス株式会社